掲載日:2012年03月02日,面名:S206X0,記事ID:K201203020A0S206X00001 (C)河北新報社

石巻・大川小 心の軌跡 ㊥ 妹と

「今」大切に 悔いなく

家族がいて、友達がいて。そんな日常が当たり前に続くと思っていた。あの日までは―。

石巻市大川中3年の佐藤そのみさん(15)は高校入試を控え、受験勉強の追い込みに励む毎日だ。「社会と国語は好きなんだけど…」。理数系の問題集とにらめっこが続く。

震災で2歳違いの妹みずほさん=当時(12)=を亡くした。中学進学を控えた大川小6年。学校付近で友達や先生とともに津波に遭った。

小説やラジオの脚本などの創作が好きな姉と、通訳を志す優しい妹。2人は心が通い合っていた。そのみさんがつづる小説の唯一の読者はみずほさん。「この登場人物が好き」「早く続きを書いて」。妹の反応がうれしかった。

○ ○

安置所で対面したみずほさんの表情は穏やかで、眠るようだった。「こんなの夢だ、夢じゃなきゃおかしい」。そのみさんは妹の帰宅後、何日もそばを離れなかった。

姉妹は一緒にギターを弾くのが楽しみだった。火葬の前日、そのみさんはみずほさんのギターを構え、ひつぎのそばで20曲近くを奏でた。バンプ・オブ・チキンなど妹が大好きなロックバンドの曲、2人で作った曲…。

佐藤みずほさん

3月18日。みずほさんは家族に見守られ、旅立った。本来なら卒業式の日。合唱のピアノ伴奏を任せられていた。「ただ寝ているだけだから、焼かないで」。そのみさんは火葬の間、ずっとそう思っていた。

日がたつにつれ、妹の不在を痛感した。新しい小説を書いても、感想を聞けない。ふざけてみても、いつものリアクションが返ってこない。もう、「夢だ」とは思えない現実があった。

ずっと心に引っ掛かっていたことがあった。震災当日の朝、いらいらしていてみずほさんの「おはよう」に答えなかった。「何で無視したんだろう」「もっと優しくしていたら」。自分を責めずにはいられなかった。

○ ○

当たり前のように過ぎる毎日を、悔いなく生きる。その大切さと難しさ―。そのみさんは妹の死に向き合って感じたことを文章につづり、石巻地区の弁論大会で校内代表に選ばれた。

先生には「制限時間を超えると失格する」と短くするよう勧められた。「賞を目指すより、今の思いを伝えたい」。一字も削らなかった。時間はオーバーしたが、審査員特別賞を受賞した。

「私が守りたいものは『今日』です。『今』という時間を大切にすることです」。弁論では決意を込め、そう結んだ。

そのみさんの両親は教員で、帰宅が夜遅い日も珍しくない。以前はゆっくり話す機会が少なかったが、震災後は夜、どんなに遅くても居間で一緒にお茶を飲むようになった。「何だか話さずにいられなくなった」

みずほさんを思わない日はない。ぐんぐん上達していたギターの腕前、学校の図書委員長に選ばれてうれしそうな姿、「お姉ちゃん」と語り掛けてくる笑顔。「妹は毎日を大事に、楽しく生きていた気がする」

いつか、大川を舞台にした小説を書きたい。「みずほが『面白い』と言ってくれる作品」が目標だ。

地元でボランティアが企画する学習会に参加するそのみさん。友達と過ごすひとときでもある=石巻市福地